

前回個人研究発表まとめ

ドイツ通俗哲学の興亡  
—18世紀ドイツ哲学理解のために—

小谷 英生 (群馬大学教育学部講師)

告知されていたタイトルからサブタイトルを変更させていただいたが、上記の題目で発表をさせていただいた。それは発表当日を迎えるにあたり、ドイツ通俗哲学の「興隆」と「衰亡」についてはかなりの字数を費やさなければ叙述できないことを痛感したからであるが、自分の読みの浅さを反省するところである。1760・70年代の「興隆」と、80・90年代の「衰亡」については後日別のかたちで公開する予定である。

さて、本発表ではドイツ通俗哲学一般の説明と、その「誕生」をエルネスティの論文「通俗的な哲学についての序説」の分析によって確認した。ドイツ通俗哲学はこれまでまったくといってよいほど注目されてこなかったが、80年代のバツハマン・メディックその他の研究者の尽力を経て、とくにザミートの『Kant, Herder, or the Birth of Anthropology』(2001)以来真摯な学問的検討を加えようという機運が高まっている領域である。通俗哲学は18世紀ドイツ啓蒙思想を理解する上で本来避けては通れない領域であり、また、これは当日の発表では触れなかったが、意識して読んでみるとカントの『純粹理性批判』がかなり意図的に論敵としている哲学的プロジェクトである。通俗哲学はライプニッツ・ヴォルフ・カント・ドイツ観念論……というドイツ哲学の流れに対する別の潮流があったことを示唆している。すなわちトマジウス・通俗哲学・ヘルダー・ショーペンハウアー・ニーチェ……である。もちろん、神秘主義やルター派、敬虔主義、スピノザ受容、フランス啓蒙思想受容、スコットランド啓蒙思想受容といった別のメルクマールを用いれば、この二つの潮流の絡み合い、一致点や対立点などがより正確にみえてくるであろう。

いずれにせよ通俗哲学を底の浅い思想として軽視せず真剣に扱うことによって、ドイツ哲学史の新しい姿を描き出すことができるという見通しを発表者はもっている。個人的には「ライプニッツ・ヴォルフ学派からカントへ」という理解に一定の正当性を認めつつもどこかで違和感を覚えながらこれまで研究を進めてきたが、欠けたパズルのピースを見つけ出したような気がしている。通俗哲学とカント・カント主義の関係というテーマについてさらに研究し、今後その成果を世に送り出せたらよいと考えている。本発表はその第一歩であった。

多くの聴衆から多くの興味深い質問が寄せられ、感謝しています。当日うまく答えられなかったところもありましたが、参考にさせていただきました。なお、本発表原稿を修正したものが『一橋大学社会科学古典資料センター年報』(2015年3月末頃刊行)に掲載されます。参考・引用・批判その他で使っていただければ幸いです。